

丹鶴叢書

後水尾院
當時年中行事 上



6 7 8 9 10 18m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 18m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 18m 1 2 3 4





丹鶴叢書

丁未帙

從五位下行土佐守源朝臣忠央輯刻

後水尾院當時年中行事 上

順徳院の禁秘鈔後醍醐の假名年中行事あるを禁中の事とぞう努めよとあて寔小末の龜鑑サカイと號す所のあらわすは符合せず其故りあきハ世へるを時うけと見る
モ應仁の乱より諸國の武士おのれへうかとあらひて社領寺領公私り所領押領する事が多すもいとあれば是より此方宮中日く小零落ちるを保元建武の頃よりは似る

至くも非す時ありて内大臣信長公あるべしと掌の内は漸く朝廷を經營する事多しめ就中東照宮叛逆の凶徒を平け四の海の浪風と志法を絶ゆるとつむかへるこれにて上と尊敬へ下と憐愍をせらるまく深きにぞれにて上と尊敬へ下と憐愍をせらるまく深きに
ハ金閥すくひ光とかやんおつりく台徳院大相國今の征夷將軍左府小至り忠節と盡く殊ニ百々もの古き車端アシタカと玉とみをあざる功他日ふ倍せらるまくあまと萬の事猶寛正の比トアシタカ及至るべ一御禊大嘗会其外の諸公事も次第小絶く今ハ跡もあきら如くよみと再舉るふづくが何事もるやアシタカかくまゆく末の世も學も見ずむまことにふく

せめて襄徴の世のアシタカまひとくあくべくあくまほくふゆきとく又おそくがなまかくゆむくまけうみをも見てたゞ聞て知る人のとく事よハあくみとじく止ふまくもく書付アシタカぬとく人アシタカゆゑん見ずむまことにふく

一正月朔日四方拜どうの一刻あまハとくより御起る常ふなまくまく方少く先御手水まゐるもいせんの上薦もくぬりとく御手洗アシタカまゐるもいせんとく御前アシタカおく次御うのひ棟木の物とて翁る御手水アシタカまくものち御湯を供す是より先ふかあくと御ゆともく刀自取傳つて

御ゆとのとくまゝ御手水のものせんの人馬ゆとのふもうひく
御湯の冷暖とくらむ事具まゝりとヤセモ御ゆとのあ
らを、ちまゝ同人御湯かくもとまゝかく葉ハ今すあれ
と參る迄の事なし御ゆとの終まゝ後上鶴亦もゐと
く御鬚をく御かくもともまゝいふいきひ給との御
くす下の大口ひくとめす御そくもいあるをき為あつて刻
限がちんぢりてのち清涼殿ある内侍燭を持て御先
小行次小勾當のあい一昼夜の御座の御歎とくとて參る御
後みハ女中馬とす何もももももももも着ノアラモ十五日ま
ハ常にもももももも司イた清涼殿の方より御そく帶あと將衣束二人參りく

おきす近習の人可然ぢ御前ふきふぬ御将衣束のうち同
所少く御ちよ手水参る先陪膳の人御前少くも手長
御手水とくとて參る棟と御手洗の中入棟のふくとくか
へて其中少深草土器一ツ俯スイよがくもとどくもあだひ
の中へ抛り是より先ふくのせんの人棟と御手洗の中より
とくと出へくらうくもと志あくとえて御手水とく
參りす御手拭よハ大まうたん一と用ふ件の次第御清手次
水の時毎度如次小坐御脚もや北東二間とくかくの間より出、おもむいて
東階より打板より東の庭ふくもとれまゝす
天地四方と拜せまと珍り四方拜のふくは今も古世の

たゞふかくすちよひ事の多まつて委記する及らず
四方拜をとるて常の御所ふ還御たりて常ふなづくまゝ方
ふくあゝみ物をひ花平もめほり茶をと供して御さ
うきとる御前ふく女中侍よしとあとも伊与敵を伴とも
諸君御同宿の時又ハ女御などあまび御相伴（兼イ）あらじ
そあゝ御飯と供す堅固うらぐの躰しまる所す定
らす御心すまうす朔日二日三日十五日立春の日す
同一ノ事ハ多方の強供御の時あゝ御さんと供す
ゆゑなまくまんぐの中央西小せまうと御禱もとと
まくうけとまると供すもんの入ハむき小僕すニ献す

初元花平ニえりへ女中もとまふ二献の時もくめて屠そ白さんと
てしふ入内侍是と役す白散ハとくとて上段の西北の角
ふもく御のみの前を内侍簾（御右の方）とて白散のとく
すみよつとく是と入て本路とてもんさんの人のがくに
まくよつてしとまゐすニ献の時うけとま進上の人
いづきを天盃とぬ其後あまのまひと供す承正のとく
まく朔日より十五日迄毎日供一たるとてまくまく
朔日二日三日七日十五日ソラとあさのまひよ著もとぬ
御事も久とみえど但代始より今も著御一と
上崩中崩下崩ソラとまくまくまくまくまくまく

主と御子の坐て坐すにあく着座の後釵子と童ハ
さすかけ帶もととかく禁秘抄より髪とあく三位已上
釵子もとあるとあくとあくと近代へ省畧の事のみあくとあく
上薦ハあくのきひよのまく北面ふ僕す中薦ハまくのまく
所の南面ふ僕す下薦ハ同所ふ北面ふ僕すあくのまく
いもん所すせりつまくを近き岳のハ南面より東ア
御座どくまゆるをあくと采女、官等すいもん所の南社
妻戸トモリと馬頭もん金器等の物とたいもんのまく
とくと双く次第小供すもいせん次第ハ今小相続一もく
習ひ傳へたまどすのまくの名慥なまくのまく

主と御子の坐て坐すにあく着座の後秉烛の後御祝あ
と御もと袴御さけあくしあと足とがまゆるをめは
うふ生氣の御袍平絹生氣の方のまく近年其まくとくまく承く召
常御所のむづの二帖の御座ふ生氣の方ふむりひて著を
めぬ上薦中薦下薦とくもくぬ五ツ衣と著を
の下よハ絆よと着用す綿のまくのまくのまく先あくの御もんと供す觸さり御もんと
白き玉器も入く同一玉器おほへくまく是とくまくのまくのまく至
て其嘉例どしあくと今よあるとくもとがりよば被
御まくれとまくと専用のまくとおやびくまくふこと
次ふ二の御もんと供すもいせん人強供御の先中央ふゆる根ふ
うとニまくと右の手へくわくと強供御のうよく亦御

前の方ふあることをある物とサシどもく同へ強供御のうふ
おく是モ右の手してくると次ふ御箸ととやめおひく二の御さん
あるがまくけと左の手をもくめおひく強供御とすこし
御もくふくかく土器入亦二の御さんある菜のうつものく
なうとがうとおもくと參る次ふ平の御さんふ御盃をゑ
く供す其やう中央ふ三どんの土器をもくとゑくもくふ
深草土器品三ツ宛重て九すう是とぞもく都合せ七うふもく
の葉とおほいさんの人尤手ふ平の御さんと持右の手ふ
くちきの葉とおもくわげとし禮酒と入いりくもく御前ふさ
しトひ中央の御やうつまことひもくめおひく三献參る加へ參

あー又おもくの葉とおもむく撤す次ふ御ゆ御もゆと供す強
供御をとくからくる土器ふうけよしきと參るくもく休
もううと次第ふ御前と撤す御もくあはくもくひぬとおぬ
をおひく小袖ふ赤毛の御もく垂纓組うけハをもくま
少く西の一帖の御座ふうくおもくへ此間ふもくも兩三
輦もくふ坐く女中男のまくまくとおもくめおひくたの御さん
ハ御手長の侍も便宜の所る置きとおもくよおほき
くもく回禄已後ハ里内のみ外ふ狭かの事あまもく万々と
清涼殿むくらまくらまくほふ御ゆとくらまく御殿
の内とある此時の事こ是モ便宜の所こそのさん手あるもく

主内をハぬまく常の小袖スモクシマツコと著すもくみハ白表
表スモクシマツコ貫紅梅二と重スモクシマツコ如些の時毎度スモクシマツコ御前スモクシマツコ著座スモクシマツコのち
もさん入座スモクシマツコ起スモクシマツコ母屋の北の間スモクシマツコ御前スモクシマツコすむ御
の右スモクシマツコ南の方スモクシマツコ候スモクシマツコ僕スモクシマツコ手長スモクシマツコ内侍スモクシマツコ同スモクシマツコ一^右座スモクシマツコ立て
御前スモクシマツコ候スモクシマツコ僕スモクシマツコ手長スモクシマツコ内侍スモクシマツコ同スモクシマツコ一^左座スモクシマツコ立て
小出スモクシマツコひきスモクシマツコ手長スモクシマツコ手長スモクシマツコ内侍スモクシマツコ同スモクシマツコ一^左座スモクシマツコ立て
よのうスモクシマツコもいさん入スモクシマツコあスモクシマツコすもいさん御前スモクシマツコ次スモクシマツコ
初献スモクシマツコ三スモクシマツコ者スモクシマツコ供スモクシマツコ御スモクシマツコ左方スモクシマツコ寄スモクシマツコ初献スモクシマツコとスモクシマツコ
御前スモクシマツコ次スモクシマツコしスモクシマツコ三スモクシマツコ盃スモクシマツコ時スモクシマツコ御箸スモクシマツコとスモクシマツコ
御スモクシマツコさスモクシマツコとスモクシマツコしスモクシマツコ參スモクシマツコ一スモクシマツコ此間スモクシマツコ小手長スモクシマツコ内侍スモクシマツコ廂スモクシマツコ

あるスモクシマツコ御スモクシマツコ中央スモクシマツコ供スモクシマツコ御スモクシマツコとスモクシマツコ母屋の南の間スモクシマツコ
母屋の中央の間の東スモクシマツコのスモクシマツコにスモクシマツコ陪膳スモクシマツコ御盃スモクシマツコと
てスモクシマツコふスモクシマツコ第一スモクシマツコの人の座前スモクシマツコの座
小出スモクシマツコ手長スモクシマツコとスモクシマツコ次スモクシマツコ次スモクシマツコ次スモクシマツコ御盃スモクシマツコ
とスモクシマツコ初献スモクシマツコ如スモクシマツコ陪膳スモクシマツコ御前スモクシマツコ御スモクシマツコとスモクシマツコ次スモクシマツコ次スモクシマツコ次スモクシマツコ御盃スモクシマツコ
二スモクシマツコ供スモクシマツコ御右スモクシマツコ方スモクシマツコとスモクシマツコ二スモクシマツコ献スモクシマツコ中央
とスモクシマツコ次スモクシマツコしスモクシマツコ御箸スモクシマツコとスモクシマツコ御盃スモクシマツコとスモクシマツコ次スモクシマツコ御盃スモクシマツコ
とスモクシマツコ料スモクシマツコ其數スモクシマツコいスモクシマツコの土器スモクシマツコ重スモクシマツコ重スモクシマツコ天スモクシマツコ
御スモクシマツコ三スモクシマツコ献スモクシマツコ御スモクシマツコとスモクシマツコ供スモクシマツコ二スモクシマツコ献スモクシマツコとスモクシマツコ中央

少々次小手長の内侍てりしと白散シロスのまことにあて行つて、
白さんと入る後まへせんのまく小もて右御箸シモトノミツ御盃ミツ
三發三献め小御シモトノミツあま御前ミツマサの御もんと御右の方シモトノミツ
寄く女中メイヂウが候る天盃アメミツをあきねのうアキネノウ置シテ敵アヘかて
御ミツマサ一歎イチタク勾當カウドウあいアヒて天盃アメミツ坐シテ二の典侍シンドウ
第一の典侍シンドウの盃ミツをよそふきてる弟三のをいアシタも
弟二の典侍シンドウの盃ミツをよそふきてるからカクの如くアシタノヨリも
三ミツあく勾當カウドウのあいアヒハ又人ヒトよそふきアシタ男の御ミツマサのよそ
きアシタ出アシタフ上アシタフ鷹タカさんアシタ人の盃ミツぬきアシタ又弟二のあいアヒ
の盃ミツをよそふきアシタ出アシタフ人數ヒトスズかくの如アヒ三爻ミツエも四爻ヨンエも

くさゆクサユかくカク御ミツマサハまくマクふフいイまくマクゆユふフ廂マツコの南
のむムうの一間イチマツのまやマヤレレふ止シテ南ナニのすスのまマくクまマくクの南
の東ヒガの一間イチマツのまやマヤレレふ止シテ南ナニのすスのまマくクまマくクの南

手小盃

男の御ミツマサ一の新シキとよそふき右の手シモトノミツとよそふきて母屋モダニ烛剪シラタケ

南ヒガの間マツコとく御前ミツマサ盃ミツと置燭シラタケのよそふきとよそふきん臺
の中央チヨウの間マツコのまやマヤレレと明アハくちよそく男の次弟ミツエ
うウてとやトヤある天敵アヘ一翁イチウ人ヒトあくアクよそくはりハリくク小
小さシカつまツマのよそく寄シテ小さシカつまツマとおる弟アシタのム卿ミツマサ強供シヤウゴ御
よそくアシタあくアク寂末シヤウモクの人ヒト盃ミツよそくアシタあくアクレレしてあ
まくマク手長ミツマサのあいアヒ一座イチザイと起アヒく次ミツエよそくアシタもいせんミツマサの入

御前と撤す後小まよひをもとをいそぎて出るを撤す毎度
毎度かくのまよひ事ともうとく入御女中起座女中便宜の
所かく小さきつまづき強供御と給る次ふ御をきひいて二のう御
めでじふまよひと居く土器物二種とを添くきて出まよ
の口かく伊与小まよひむまよひ同人役す伊与まよひと
二のう御りか傳ふ敵ちまよひ伊与はとむ夫よりつまづきの
采女志やいづらく同人敵るくはりあらむ者ハ或ハ二の
采女努あらわく半んやくをふくのむことを正月小限ら
す節朔と小かくまよひ小朝拜もまよひ御と帶と著し
めびよ四方拜の時より同く小朝拜のまよひ亦記する小不及

事とまよひ還御志りくあまよひ前會事具するのうと
ゆきも亦清涼殿おもて御と帶あまよひ止御とき
よきとまよひ内侍二人命婦二人便宜の所ゆて髪上す二のう御め
えきとまよひ四のう御め合力す内侍二人髪上て後劔室と案
「あく清涼殿の北の上段おもて案す二階厨子あまよひ大宋
の戻風と引めぐれて内侍二人戻風の外よ復ス止御の時是
とまよひ議定所の東よも出く母屋の南の房二の間とて
むきの南景一の間と出く御と小ゆく職事共扶持す南
殿小止御の時ハ非色の者ハ御後ふりまよひをもく命婦二人
清涼殿の東のすまよひ北の妻戸よも出く御後よゆく節

會の事又次第よりて筆とて近年立かくの比
還御其後坊家よりて内侍よりて御内
大臣所へ出で妻戸の簾下より入て卷を歯固ハ陰
陽頭勘文よりて日時と定めらるゝ朔日よりたゞも
強供御已前ふ參るあつて參る所もむろとおつ方むとせ
ん等より強供御と同様先打敷とて次小酒さんと供す
中央すすう次小御右次小御左次小鏡亦中央酒さんの次小御
右次小御左次イナレ次小御左次ヒシ參る酒さんのみとどきのけく三献奉
くまくま一二次第は撤す平のさんひよと撤してたゞまども
打てまづ中へ入て撤きて齒固ハ歎きのハあつて画をくもく

格別のものなき

二日あくまきは昨日ふ同一二本上まと進上へて御
そそきあく常の御所上段夜のれく障子の内あく
ソヌと著せずしてはまゐるゆゑよまくの諸どゆひ
くまくま正月から年終まで毎度がみゆくうけとくのまくのほりとあ
ソウのじよきの事より其やうまつ御アラシふ三方一ツ
せー花びらこぬりもくとくつかかとのことあく五辛お
あくの物とく入て御前まよひす御アラシとくまよひ
あくむらさくつまよひて撤てく庇よりて中鷹下鷹より
くすみよひて彼さまの物とくまよひ花びらのうや

法みまくねく女中上中あまくまぬ次ふてし體だけと入
じまてよるニ就くるくまくま御さむは三ツまつるもま
むとハ次第みほりひつハ句當あひまくぬ牛飼御札
をも清涼てんのすの庭ふくろく句當あひ西面の簾を
うおせうめあめうめと三度り牛うひ其声と
いきまくまくまく退出ス今夜ハやまとふちじもまくと供
夕方の御祝をのまかまくほくたの御さんハ昨日のと撤本ノ
く其所小今日のとどまくまくまく今日のとあすとま
三日のとハ七日まくまく七日のとハ十五日まくまく十晩
のまくまく其日撤する立春のとハやまく當座小撤まく

女中まくの紅梅ふくろくおまくの衣裳之内のとま
衆志まくのまくのまくの口まく御扇とぬ句當のとま
是とまく傳ふ

三日よりみ物うけとま昨日よりまく夕方の御祝と同
御朝のとまの毎朝川端道喜是と上ル是と舌餅とよの入
道喜前名五郎右衛門當時まくまく名家の名物と云
すまく女中まくの紅
梅うめおも貫くまく是と雪の下とま

四日よりみ物同七日とのまくまく十四日迄ハシ一花平を
供すまくはまくまく己後ハ御うつの後むくまく斗まく
まくまくのまくのまくのまくの御さん今日まくまく常の御
所まくまく上段のす御座ふ南向ふ座やめぬまくしの

御おものぬめままみみかかねねとともも御ごぬぬとともも御ご膝ひざふくららる
上じょう薦すくを手長てながの中なか薦すくハはじじとともも御ご持もくくの
南みなみの間まとと御ご前まへ小こすすむ上じょう薦すくハは上じょう段だんよようう北きた面めん】
俊とス着き座ざの後うしろのの下しも帯たととかか下しも薦すくハはじじとともも二にの
うぬうぬ是いのりりの止とまる御ごせんせんととやの口くちとともも傳つてて
とと着きすす次つ弟だい小こ供そすす先さ一いの御ごももん次つ二にの御ごもも二にの御ご盤ばんとと供そすす
ままとと御ご飯はんの前まへのの次つ注注小こつけつけの名なあありりととううめめ給けてて
御ごままととううららまま一いの御ご盤ばん小こかか一いもも終しゆ次つ示し
下しも薦すくととぬぬとと御ご汁じ等とうとと供そすすそそ
後うしろのの御ご湯ゆままよよてて次つ弟だい小こ撒さすす一い二にの御ごもも

を撤とりする時ときより下しも薦すく又またぬぬととのの次つふふととううき
のの御ごままととぬぬ女め官かんホ便宜びんの所ところ廊ろう下げののやや禁きななくく
ももう上じょう鳥とりの飼かいととままむむああのの御ごももんハは毎日まいにちががの
ままよよああのの御ごももんののるる時ときハはいせんいせんの外ほかの人ひともも御ご前まへ
るる時ときハは正せい月つきもも必ひくくぬぬとと手てににふふくくかかくくるる之の
うげうげどど女め中なかのの人ひと數すうよよ寄よううゆゆ名なふふ有あ無な不ふ定ていうげ
取と參さんる日ひハはああとと御ごままとと奉まつううううけけ取と參さんるる日ひハは根ね本もとううけけ取と參さんるる日ひハは故うななううううけけ
もも七しち日ひ十五じゅうご日ひ若わ立た春しゅんああききハは參さんううタた方ほう強きょう供ごうう御ご立た參さんうう御ごももすすうう後うしろああきき盆ぼんととうう時ときハは御ごもも

の供御と次つまふ入何ともも御さんとの御すり御さんの時御さ
うの一種もろき土器品入三方一ツよどとゑく御下まで土御
さうきのはひすみのミケ日のこと御のこく女中ハシマリハ
常のよそく双居スル通すあをい旧院のそりめ後陽成院の
比延ハ今日千秋萬歳參スルとふ親町院御事の後も御
忌月あきハ參スルとハシマリ回院御代の間中絶ハシマリて彼者
の子孫共のゆくハシマリをあすハシマリ行ハシマリ今ハハシマリ今日
こまくまく宮門跡寺トモイ衆ハシマリ年始の御文參
る伏見ハシマリのよつとまくのをの女房持ハシマリる勾當の所ハシマリ
帶ハシマリとハシマリよその返事ハシマリひ司ハシマリとハシマリ奉ハシマリ

御寺の御所のつゝひよも帶ハシマリとハシマリ此外ハシマリあくまく殿
八条殿ハシマリの宮方ハシマリ御扇ハシマリとハシマリせまく勾當の内侍文
さくらめハシマリとハシマリ參ハシマリ

五日あゝの程大工の惣官ハシマリとハシマリのうのうめのハシマリ内侍所ハシマリの
前ハシマリうちハシマリ今日ハ櫻町の千秋萬歳參スル清涼殿ハシマリの西面ハシマリ
御座ハシマリとハシマリ御覽ハシマリあく三ハシマリまよハシマリ一ハシマリ款ハシマリある女中
とハシマリ後議定所ハシマリ門ハシマリの男衆ハシマリ御ハシマリとハシマリある勾
當ハシマリよハシマリ伊与ハシマリかハシマリ院の宮内卿ハシマリとハシマリ四
日ハシマリ參スル千秋萬歳ハシマリのハシマリ清涼殿ハシマリの西面ハシマリ御覽
あく五日ハシマリの南ハシマリの方ハシマリとハシマリ御覽ハシマリあく男衆ハシマリ南

の妻ヲトシテ參ニ御通しあり。トキモ此比ハ五日
也。參半も便宜の所ある事にて西面ニ御覧あ
リ。六日夕方年越の御事ノ常の御所より一執三ツサ
參る。うのとき時女中の衣一着ヲ入るのみを用ひた。この
時又同一郎匂も同一但是ハ御事ノ小別殿の行幸ありハ
其時署あつて造作をす。初より袴ズボンを著ふなまき散
あふと供す。

七日向の物御事と供す夕方御事の御盃スイ參ル
庇の西中央間の北の御事一献ある所も陪膳手
長ホの作法もありの御飯は同一四日の所より女中
小を御みテ御前より上膳の事より御前の事より
小を御みテ御前より上膳の事より御前の事より

中薦以下ハ御事の物これらのみ
但一ぞとふとすものハ中薦下薦とよどみふ
ヨミタタケバ御事の強供御と供する次第の事より
前より同白馬の節會坐御以下の事も元日又おお
此ち諸禮と宮門跡拝家方御も尼衆外様衆院
家諸寺の僧医師より。迨年始の御禮とよび慶長の
始つてまことに一人二人で不時小参事と近年ハ日と定め
らきれり。參る事よりぬ法中ハ修正するが如く
今日迄ハ參内す。近年ハより多く入道尼
風情も參る事より。八日より已後の支ナカニ生マツル医師もハ

御用あつまひ八日より内ふめどること又常の事ニ諸礼
日ハ御引あはり小御下をもね御前張或ベナリをもす内
宮門路持家方ホハ勾當局トモ伺公あつまつ局やく
一教あるもの後常の御所シテ御對面ニシテ二教め
第一の人の内シテ進上あるものフ天敵天孟とくま
御比丘尼衆も同一日野鳥丸抑原ハ外様をもと常珍
御所常御所日御座清涼殿もく御對面あつまひともヤハ
御所皆一所にて三ツ名たゞもく御對面あつまひともヤハ
ミ御禮シテ後ミテ席御ひさのひ申の角のこみ一帖と撒御
日より裏御ひさのひ申の角のこみ一帖と撒月朝
月中あるもの正月候ス御ひせん御候ス人手長の入ト等萬てよき申の口小伺云々御まつまと供ス次

ふまづ御前ふたりりく後むしろの衆まつりぬ六位藏
人是と役す南の戸と明道と手長り人敵てん天孟
をぬ廂の中央ふすみ坐すわ給る本座もと御され
とよもく一人ウキトおのれのおのれ後御前撤さつ
入御是ハ外様ほかの内うちとうけする心こころ此申日野ハ武家の
傳つらふ定めさだめ後のち内うちおほくらまらま右う中なか
ハハ近ちか比ひ迄ごの事ことありハ三人の名なとなあある
ある若諸禮十五日已後よ後のち己後ご三さん月つきと用もち
ききとと此室このむろ院女中めいじゆちゆう正親町院まさおとまちいん後陽成院ごようせいいんの
十五日已後よ後のち此室このむろ正親町院まさおとまちいん後陽成院ごようせいいんの

女中年始ふまゆる一時も若十五日已後あひて候あるじとくらむと宮内卿より外様の持家衆外様の門跡衆外様の番衆院家諸寺の僧等は清涼殿の北の方より御ふみんあるへ惱別當本國寺清水寺本願寺医師やうのまのハ小御所より御對面ある

八日今日より後七日の御修法あり御ひり奉行御て物とり出す内侍びくらぬまく甚至さん所の南の妻戸の簾の下より出する御あそ物ハ御鏡也びくらする御あそものほくふつむし真言院の御修法ハ久しく絶え元和の比迄ハ太元師の法のみ宮中より行をまくと故三

宝院義演再興あそひ事とあそひ事と傳まく長禄已來絶まくと元和九年再興あそひと已來々とあく年く行ひと其後行ひと別の御殿もあるが太元師の法ハ寺より行ひと醍醐理性院是迄御あそ物をや出ス御あそとの出まくと毎度同一

十一日奏事始あると去夜より御神事と神事入の御行水の後服者月のそな人の人ハ御所へ參らす局に迄ばあらぬよ不及引かば御下さる御事事並みよと議定所に出御神宮の奉行申次く神宮傳奏西のやうこよも入る候す御ふくらむとくがひて圓座よりく奏事の日六と芻

御坐と下駄平伏す次入御是も根本十日小限らぬ
十四日年越の御坐常の御所より一斎する事すら
ちゆ油と供す

十五日あらわ物あらわ粥と供す御らゆの御坐とる女
中も御前より後七日の御坐に同レ夕方御いそひ強供
御御前へ同レ次清涼院の東庭少く御吉書も三越打
近キ記ニ小
三越打ハ近年山科志ん上才御領の御代官セ時より志ん上
清其例トアリトモテ今ハ御代官アリセ志ん上才モアリ

サ西字恐錯誤
涼殿へ渡らをねりまはりて物、御吉書と硯の下ふ
まき持御後は行内、御座、御剣とまち御坐
又勾當の内侍御吉書と硯の下ふまき持御
ろよ行内、東の庇より御座よりめす勾當内
侍御座、御剣おも又勾當内侍より御吉書とまき持
同庇の南第一の間の簾の下ふまき持せハ戻入さり
御吉書とうげども東よりのまき持理職の者、慶長
またばすあらわ着す
近年布衣と着す階より御吉書と給りまく三越打の
と小あらわす御吉書と入り帰り奉る戻入階の南から
る燭の下ふのうらまくとまき持せの者よあらふ又三

毬打の事とふゆとく火とほく牛飼仕丁あらわしと著す 木聲と
けくもと事とく三毬打の竹二本と御吉
書のまつらうる硯のうすをもとものもて
參る藏入くわいり御吉書ごきしょたるすれの下へ入る
内侍うちし御前ごぜんからむのやつ還御

十六日まづまのちハあゝ物よばあめのそんかととをまふ
今日も御粥と供す御ごあまのいのくの繪像と御三
間さんげん西向小香花とまか御前ごぜん或御代女中上薦おんじ
ハ念佛七万及觀音經二卷心經三卷ゆづる念佛六万遍光
明真言十二及中薦以下ハ念佛六万及觀音經一卷心經二

卷ゆづる念佛光明真言ハ同前トキマツル踏歌節會出御
御已下の事前と同一

十七日まづまかと供す舞御覽あり清涼殿東庭左右
の樂屋らくやまづまふと小翠簾こみどりれん御見物所ごみつしょ先
鶴庵丁つるあんじあさ小顔こがほ奉仕す事こととて御太刀ごだいとうをぬ
藏人東くらわんよりのまくは是と下すかへてまつまつて次
小樂所こがくしょ奉行二人舞の目六めろくとまくは東ひがしよりのまくは左右の樂
人二入階下ふすみてく月六げつろくと終まつまくはまく振舞まくはん三折木
常つねのまくは宮門跡くわんせき括家方見物くわんじょ參る御相伴ごばんゆき一幕いつまく
手長人てながに藏人くわんじん五位ごい取と御前ごぜんと侍臣しよじんハまくはある

十八日今日もおと供す三越打あと亦曉よと催くつ
場代く事あ朝餉く御覽あと女中ないしん所小候
寸々卿侍臣とすのこ候ス大とく役者と召具く參る
陰陽師大黒囃かつて捧ぬく大鼓ホの事あらまつて
之松太夫と云ふかつて常の御所よと一社こねあと參るうち六例のむ一花平よと
御祝あと

十九日御會くめあと題兼日觸らる宮方へハ向當内侍
奉書く參らす入道親王もと宮方トヨヒ傳てアモ拝
家方同門院大臣なよと和奇奉行トヨヒ傳へ參く其外ハ
和奇奉行折紙く書つて手く触く乗燭の

重ねくめ清涼殿の北の方正面の御座小暑御此間リキニ
官方拝家方署座法中ハキテ取
カシ毎度くきりバクニ進上 次小讀師署座讀師の氣色どくち
く誦師署座次二誦聲署座次小誦頌の衆おとく參る

よる誦レモトク各退く次入御官拝家方ホ起座常の
御所よと一献あと官方内との攝家衆ハ御相伴く其
外ハ清涼殿く勅盃あとくもと諷くと
サ日このあとくのものと御祝うとくもと俗示
なう事とみえくと

二月朔日あと御さんの次手朝御リモトク如例正月

四日より朝餉と夕方の御祝あとも大うい正月が同
小さうと白散をあそひ初んがん正月ハニッ肴あそひ是
御御もとへてかどんとこよと御前の御もとへてかく女中よし
まふ上ふ中鶴の方御前御下下鶴御のけうと放放
き又又むすする先と同一御前御下御のけうと添添
勾當内侍右の方御は是御のまふの料一鉢御有
と供する御初御とハ御左御方御へ御寄御二御と中央御
おく初御と撤御せる時毎度此定御三御めの御御まつ御
まつ御女中の人数御とが御りと重御あ御御盤御まつ御
まつ御參御残御天天盆盆と放放る爲爲勾當内侍追追

間中鶴御ハ三と下鶴御ハ白と土器御は重絲御時御まつ御
まつ御土器御と御お御三御菓物御と供御御御まつ御
出御まつ御る時御ハまつ御土器御三御ハ取御けく下御
た御ある御參御正月御御御まつ御垂纓御けふ御に
か御生御事御入御の後女中當座御まつ御
御嘉御例御小御まつ御す御御御まつ御
出御次御通御のび御のま御引御此御まつ御出御
す御此御外御元日御同御

十五日御三間のひのの方御小首西面御涅槃像御掛御
前小机御置香花佛供餅御と御ム御前便宜御竹

小柳の枝を立て捧物とかげり供御の御捧物院女院御所（院御ある日の日記ハ或ハ翌日）或ハ一兩日後（年月日）近頃此捧物共の龜と申す禁中よりも院女院へ捧物參る般舟三昧院へ杉原十帖扇一本參る女中衆よりも扇參る下行あり

廿二日水無瀬宮の御法樂あり一夜御神事なし御行水の後月のさはれ入御所小參らす局より俟すと萬日或御當座時宜よ寄る但大ういハ兼日之四五日已前題とく

もる其やう御會（めふ同）正月十九日よりえう短冊ハ小高たへ一枚と（まきぬ）二つと（まきぬ）包て上下のあまうと（まきぬ）折柳管（まきぬ）水引（白紅）と結て札とほく水無瀬宮御法樂來廿二日狀定（當日）に番日あり詠あんのん（まくまく）と（まくまく）あつて次第方（かた）かく御行水（みず）りて先毎（まことに）常の御所の西の御座より御行水（みず）りて先毎朝の御拜あり次御拜の御（け）なまく御座より著（き）水無瀬の宮の方（おもて）を（まきぬ）あけさせすと微音外（まことに）前二日已來鳥味と供（とも）り

廿五日聖廟御法樂あり御神事已下水無瀬の宮御

法樂より同ー短策の札ハ聖廟御法樂來サ五日此定シ

三月朔日毎年二月朔日よもたゞ

三日あさ御盃をル朔日よりれまー鬪鷄あさと毎日極薦殿
上人のうちも触催ー各みそどもと進上ス牛久レ兩人
うるりと鷄を合す高ヤミ戸かく牧事あさとあさと年とへや
御覽あさひとまきひと見例のモー夕方の御祝あり女中
ふよひの御盃トモニツキと初就^ハ御前よりるアテ女
中うそくぬ三翁めのまうづきハ正月の如く勾當内侍まで
天盆^ミ三翁目のてじふ桃の花とをぞまく入ル此がミ
ホ朔日より同ー旧院御ゆとりの記より己の日すあさと
あ

時も三月三日より御人形うちりと御なごとの御びと添て生
るかくやく小あまと以てうへきもミスヘイ己日ソラマキモアモ
慶長のころも賀安の両家を上ち^トが^ト賀家ハ断絶一
今之陰陽頭幸徳井賀家の庶流もまた不堪の事多
是非もく今ハ安家のモモちん上^ト入形^ト辰日を上^ト
本此御所より衣とぞむセム是女中のモモと其やう洋と緒
と方寸餘ふ裁^ト角懸^ト刀^ト穴^トあさと入形を
つとも^ト入緒^ト刀目^トモニツキ^ト折^トと重く結^ト
がのまくし^ト御枕^ト其夜ハおもて翌日己の日の巳刻

小中出をもと出まくと是を近づく事はなきとの如く
そくたゞん所の妻戸内侍出する御ゆゑに上乃
日記よりまとて今ハ止むまとての事もが、毎月巳の日毎
入形ちるをうも

四月朔日毎事如例ノ火鉢ノの火鉢ノの名目いつのこ
と撤スノの御盃ノ女中ノの張ノの給ノと
つと署する此月ハ諸社のまつとも多かれと今ハ止むることも
なし後奈良院御記天文比ノまつハノ日吉の神事ノ
あすかれと此らハ神事のまつノ祭ノの日ハ社司
もあすかれて祭ノ七葉ノの枝ノは

簾の壇ノ一間ノ二所ノからむあ

十六日ノ夏花ノ上膳ノの入是ノ伊勢内侍所ノ二葉ノ日二葉月二葉ノ
下上ふ二葉ノ貴船春日住吉平野玉津島祇園稻
荷多賀山王八幡御靈天神已上二葉ノ諸神七葉荒
神觀音愛染不動文殊虛空藏地藏聖天藥師也志
や門天大也ノ上二葉半ノ諸仏七葉六道三
界衆生七葉此外亡者ノ御心ノ次第之時宜少ある

をうも

五月朔日毎事如常

四日 やう物ハ主殿寮ふくとあそと此比ハ丹波國小野ト
リ所 小野御丹波境鷹峯を北三里山城の内へ勧修寺殿シ去トヨモ其ス同
所のものゆきまつみと御さんとふふとつらあやめの枕
薄ヤリ一對トヨヒ御枕本もあも薄ヤリハ極鶴調進寸
御枕ハ勾當内侍よも玉す其やうあやめとけ五六寸ハ
うきふ切く五寸廻りノロコ小跡ミトカクシナムモ結ひ
く両方の小口ナムトニトモヤマシキモ

五日 ありみのちやうここと供す朝盃あくうきの水例の如
一ノハヤシの御湯桶よのまうぬの御枕一對と
やうよくまかかくと小止スウガトガラシモ引と

御ゆ下脱文
あり

御ゆ入御ゆ御湯の中ふきふみと匂い
ノ清涼殿の東庭おにゆまのとひもふ高らん小添タツ
ぬの御殿とリふきとあやめのとあらわやめれハ
六府のまことこれとひまつてある此ぞうハ東坊城家より
材木下行ホの物と出一く衛士とくはくとめで是を集
あき又まい一所の西よりは梅う畑と云所と材木と
出一く是も衛士作とく調進する三日小同一く御
所とくす玉とがくまつて一兩日已前此御所と
りそいと所の薬玉と御帳のた右のちくふ結いつてある
の年中行事とくあと此ぞうハまくとれなつて

八日今宮のまつもあひと安家物忌のふごとを上す御
冠の巾子の中まつてらる其余ハ御所と女中衆まつて各
元ゆひまほと洛中のまつことふりのす

十五日夕モ物忌の符をル

十六日御まつす正月と同

六月朔日ノリアリ物ふるやまがちんと供す夕方の御
いとひふ祐歎まつて氷をもんと供す二發供まつとま、初
献とも御左の方ふるを寄女中の衣をもとめまわし
と著は其外三引如例

水合陰陽師大黒行之の大黒とりひきの称号土御門被官刑部丞とえ塔の壇今出川寺町か在之出

雲寺の旧跡

あて已上イテア

七日まつて會あひと安家物忌の符を上す前同

十四日今日も物忌の符參ルとどん会の御まつす

こふあはよ
むすよ

一粒強供御まほの御所薦めぐらしをまつす

十六日薦日あひ嘉定じあてとお姫院女院あひと勿論參る

御所とお姫家方門脇方との外久く時宜よりまつた姫定

まつたまつては承うけあひます方かたまつ嘉定何なんくも七

種たぐとまつて御前ごぜんは供す親王御同宿のとき女御めごあひて
るときハ御相伴みだりあひて御前ごぜんと撤そつて後女中御めごつづと持
參さんて御前ごぜんに給る今日ハ女中の衣きぬをまつすのう
群ぐんの衣きぬを小こさまとどまるこのまつては承うけまつてもう

さしにすくもおきりあひて内への男衆ハ兼日長ちよと
ふき催一と參る常の御所の南面とまゝ放くもと申
の口との間は翠簾とくらむと女中見物の所とく男衆
おもひよかうと持參一とすのと小候ス公卿一列殿上
人ハ公卿の後小又一列ニ上段の南のもとふ志と終もと志
をおもほしく御見物じどうくうけつと給りるよもと
下薦よもよもとく更ふ各すゞ生え元の座よも六位
の戻入よもよもとく小者の基臺あくまく出て御とけあつと五と
土器をそろそろとあひまくとく毎度名ひ過ぐる多き

ノミナセ

晦日くす御ゆゑる參つて御くとあくよひかとみよし
の水とくく是を調ふ典侍一人御ゆゑるの縉禁秘抄あすき
とくく御くと洗ふ一人ハゆとくまよひある金殿供之當
とあり此とく時六人士も町
人あつ毎日麻上下く御產所へ隔番とく勤む此中とく女アトヨモのき又歲暮
うく田耕と歎す古例とく山名衆のこ今仕丁壯年のこ勤む御飯炊く役おき
古ハ山名の百姓勤く故ゆゑ山名とな山名とな禁裏きんり七鄉しちきょうの御領地ごりょうち内うち大典侍御だいにんし御祝ごしゆく
としとを上ス御ゆゑるの人ふすゞの水の御ゆどきぬ
御戻もど月の輪と調進しよしん内侍所の刀自じ傳つた臺
もん所のふくらひのくよもく御引ひきあはれめまく朝あさの
御座ござく一めまよ上薦じょうじ一入いり側そばのむくまくとく御前
ふすゞ署座しょざの後うけ帶おびとくとく中なか薦じきぬと署

てふしの本輪を麻の葉たる竹とぬ
く麻の葉と輪を御前ふまて參る上薦と
まく御座の上より麻の葉と右の手にさへせよま
上薦輪のとまく先走の御足をまに入り次ふ御右
手月の名うのまく人ハ手とせめいめもくまこと
云奇と御口の中ふ唱まふ是らき俗はあらゆまこと
後成恩寺閑白の公事根元抄ふ此こと書せらればいわぬ
むづよつと世俗よあまくすとまく上薦をまくま
輪をまくまく輪ニツと越え御うろままで出おまけ
此定よ三度のせまくと御手ふまくとおまく麻の葉

とまく上薦輪をまくまく撤まく次ふ入御をまくまく
まんのまくある輪を女孺とまく御前まく參る女御ふ
とまく御三間アキ典侍は參まく其外の女中ハ
居くもいる入もくぬ人もくとまく著す服者月の
ときの入もく次第ふつまく後輪と東のとの
とふまく上くまく薦まく六位の蔵人便宜の所トヨウ
ちりく輪のまく候ス内くの男衆次第ふすまく蔵人
輪をまくまく入事とまく蔵人とまく輪とま
又とまく入く下くまく采女と官女孺はまく局の
官女よりまくまく入りともまく御三間アキ薦あ

けをハ御引直衣めまゝ御座はほへめぬいぬ
女中著座上鷹一列御座のじまは方 西上南面 中鷹
一列小御簾もひふ 南上西面 例のじまもひまん手長
座と起くまつ御盃次より初白丸と供す御盃ある
ヨリ女中より次小二鷹 唐丸と供へる以後男と呑
まむ公卿ハすのこのまみよはく殿上人ハ公卿の座のじ
ろふ候ス次より戻入爪ともて出す各一高レシをとぬ公卿ハ座
あく殿上人ハ公卿の座未よく一人マ呑出ヒテぬて
一御下ルものゝ是より應す此間戻入土器の物と公
卿の座の前へおく御盃をりく女中より通る下鷹の故常

のこく寂末のほへも終く後伊与てりしヒ盃と持
く出戻今よりの本よりすすむよき事とくまう
男ふとくは是又公卿の座あく殿上人ハ呑出之事
公卿座とくらむ平伏次より入御女中起座次男退下
七月朔日御ひそひ等如例

七日梶の葉小哥カタシメ二星ツツキ手向る御引
なほしめく唐三間の御座小著御唐もせんの入側の
きぬといまく御座の前ふるかく帶ひうまとがまく候ス
内侍ひつ衣とく御もつまとまく其を重観の
中のまくとせりと出しつづくよすく一とくつあ並

上小三ツ下四ツの葉と水とつすゆひじらふこの
上方の御右の方角よりせまあらしき華と二管墨
一挺硯の傍より梶の葉七枚と重ねか枝の皮七
すぢもくらへん七枚もく索へいニツを三方よきと御前
またく七ツの硯よいもの葉の中ある水とくまとくまく
墨まと梶の葉一枚りとく歌とくせすふ或ハ當座
御製或ハ古歌定やうが硯七面とかて一首はりを
終とく古奇あは七首と當座の御製
あは同一一首と七枚よかあるもいせんの人梶葉七枚を
重ねく索へいニツを中ふ入るが卷上下と折くわらの
木の皮七枚もく索餅七枚もくと十文字よが結ひ

く出スあらご女官便宜の所やひよ打あく中あるものふ心と
かくさがくぶとのかくさゆくと毎度の事ニ御硯ハ院女院
親王女御ホ御座の時次第ふまゆくをく御きの右京
大夫あくまくくるルタの御新まく前一兩日の中上らふ
ちの輪と調進せく御所よく女中衆よくあらぐ袖
ほきらる主上のす進上あらご御そよづくらるまくのう
父お二親を入ハ輪三金銀紅が、親ある入ハ輪二金銀紅二
親もあらご入ハ輪一金銀紅朝益あらぎひホ例のうく大方
御祝小初献金銀紅御汁と供ス土器ニ少シ御汁とうけらき
く後サシウニ口めす唐トモル又二口めす次ふ索餅と供

す是も御下る次ふ御盃と二物御ゆか三さんから
を供す女中御前のとくとく入らるゝなまこゝ索へい入
くきぬ三款の唐瓜も御もん入らるゝ出そ一窓キレと
こゝの星の和歌兼題より各詠進ス講せらるゝ迄ハあ
車りく置るゝまゝと毎年一首懐唄を若七
首のうよアある同御遊ある勿論御所作堂上地下
のかく人ちく盤涉調七ある但御遊ハ有無不定之侍
めぐれ更盆前此中ある日限不定と兼日官門跡御比立
尼衆内この男衆ふき催せらるゝあらじ親町院の
御時迄ハ官門跡御比立尼衆ホ幸せらるゝ旧院の御時も

まゝ一度おのゝ志こゝる今出川前右府晴季公をも
座もゝあきらめ其後ハおのゝ名あきらめこゝハな
長座窮屈む暑氣もゝあらうもゝあん敵ある
其ゆゑよ日どゝもゝあらう是も唐三間とて一室ま
みづく天盆とぬ天敵まゝひぢりあらゝもゝの時八土
そん十ニ元もゝあらう夜あけもあらうのゝよくひぢり
今ハさすがにすゞり毎度曉天もゝ御座已下公卿
の座もゝ連がまゝ月も同一女中ありまゝと
すしと署用まつ初献セイ御盃一物もゝ女中呑ヒク
くる二物セイ御とくまゝ供へる後男どめす公卿

のこの座シテ蔵入シテと公卿の前シテと公卿の後各シテ内侍御前シテの御汁シテとシテ參シテ公卿シテとシテ汁シテとシテ御下シテ内シテ一シテあシテをシテ參シテ公卿シテとシテ藏入シテの鉢シテ入シテてシテきシテ公卿給シテとシテ御盃シテ參シテ女中シテとシテのち蔵入シテ敵シテ公卿シテとシテ座シテ公卿シテとシテ殿上人シテハ公卿シテの座シテのまシテ召出シテとシテ其シテのち公卿シテの座シテのじシテしろシテ僕シテとシテ二シテ献シテ御シテハ第一シテの上シテ敵シテ女中シテの座シテといシテ女中シテ公卿已下シテ召出シテとシテ馬シテとシテとシテ四シテ獻シテハ次シテの上シテ薦シテの敵シテ勿論シテ御前シテの御シテせんシテとシテ前シテ五シテ獻シテハ天シテ敵シテ六シテ獻シテとシテ供シテすシテ公卿シテ侍臣シテとシテ御シテ箸シテとシテ入シテ御シテ月シテ同シテ

後各シテ内シテの時シテ勾當内シテ侍入數シテ七シテ獻シテ物シテとシテ供シテ五シテ獻シテとシテ供シテ御右シテの方シテ可然人シテ女中シテの座シテありシテ男シテ天シテ敵シテ入シテ手前シテ次シテ人シテ約シテ公卿シテの座シテ土器品シテの二シテ出シテ天シテ敵シテ後シテ公卿シテ事シテ入シテ御シテ月シテ同シテ

十四日シテ上シテ今日シテニ親相具シテ入シテ燈檠シテ火シテ

十五日今日もとく海う火をみへ夕方の御ひとく清三
間まくおる御座公卿の座已下これら用よ同一先御盃と
供す上鶴中鶴例のひとくまぬとまく坐くかく帶をうる
とく下鶴ハシメテ初献モスの次小二の御もん次
小御汁モウ次少しおまのせんの入もんの供御の緒モト
ミ引ひろく又ちひく包むふく物のうちく御もんしん
たまは精進の物と一種是も緒ともいひうづ御もんとど
せきゆくまゐるモウ次より御もんとどる次より御の御湯
をみて參る御汁イシの御盤ふまとさするがまくけゆくとまく
御湯モウけく參る次弟より御前モウとまくつまの御もんと

あまと残モウニ二幕御まわと供す其のも男モウとめす公卿例
の座より女中男御モウ例のモウ一次より御もん五斗參
る次ふ三献モウと供す今日八男モウ丸と天敵モウて
馬モウほりあまも是モウまじ公卿の座のまモウのうけおのの
出例モウの事モウ入御

十六日モウは清正モウとお家方モウおまく

十八日物忌モウの符參る前モウを

八月朔日モウ御モウのじとく各モウの進物モウ
返モウとくぬ儲君親王モウハキムモウ十帖鳥子一まつとまつお
おもぞとく又三りとく都合ハツア折腰モウ同一鳥子モウと立ちくらふ切女房モウ
お帶モウの如くモウ入是モウ一帖モウ十帖重モウお松原の帶モウの如くモウ又同

鳥子アラシ 檀の級タニノキ すゑ級スエノキ ふまのへ 一つとツチト 参る陽明
えねむらかくす 次オレ調アシオレ なう ふまのへ 一ツとツチト 参る陽明
まつまく中高マツマク まちもんマチモモン 一十帖イチシツ 御帶ウエダ 二ニ まちもんマチモモン 参る 飛鳥井アシカイ まちもんマチモモン 百枚柳筈ハンドウ
一十帖イチシツ 御帶ウエダ 二ニ まちもんマチモモン 参る 高倉タカクラ まちもんマチモモン 一十帖イチシツ 御帶ウエダ 二ニ まち
参る みまつあたごミマツアタゴ ハ御ウエ まちもんマチモモン の木キ 一ゆイチユ 帝テイ 二本ニボン 参る
の頭アシカイ まちもんマチモモン 丸鴨マルガ の社勢サセイ まちもんマチモモン あへ上アヘウ まちもんマチモモン
大方定アハタケ まちもんマチモモン 其外諸家ソクエイソクガ 大聚太刀オウジタケ と進上シンショウ す
の名字ソウジメイ と書シル と附タタキ まちもんマチモモン あへ上アヘウ まちもんマチモモン 太刀タケ と
きぬ將軍家キヌマウジヤ 御ウエ 太刀タケ 進上シンショウ て太刀タケ 以ヨリ 御ウエ 所ヲ と中チホ す
進上シンショウ のうちたひそん所ヲ の妻戸アメド と勾當内侍コウジョウナイシ と入武家傳アムカヒツ

奉ひるを元ハ太刀もさへ上とまへるを旧院ゆゑに上日
記あるを銘あるをもすあもつてうづモヤキモニ事モヤ
馬ハ左右馬きの官入引く出朝うきひよ御覧あつて
御返しは大うぎそへ十帖ようち枝此橋の枝のセ
ナラの枝あり勅作入
くぬ陰陽頭札進上御との柱よまる牛づひ御供ふ
きる正月よ同一あさ益あとのまひおそれ倒の子タ方
の御祝初献よそぞろあらわしと供す是す初献の
もち六月朔日のことよりもつへあとのまわるまわしれ
十五日名月御まつはるの御所よみ參るまつても次
たゞ

茄子と供すあすひとて御まへく秋のすゝめ穴とあく
穴のうちとニ爻もととむかみく御手のひる御さうじを
參まぐのち御前のとてつませいまくさんのかまく
まぐの御座るく月と御覽ある彼の茄子の穴と御覽
く御願あるとまく専世俗よ流布の事、禁中うそく
いつの比とくともまくまくまくまくまくまくまく

十八日物忌の符をもる御灵会の御さうさくあるまほすう一献く後常の御所より參る

九月朔日每事如常

八日内蔵頭とくとくと献ス女中方の汰汰うて菊の花

院女院御所より女中より后のねじり
时ハ后の御身よりまくらふ作より菊の枝より
ほのきをまかし馬をやうへの内より内侍へ
ひきぬきして參る常の御所西庭より菊と大黒と
と役ス下行あき夕方常の御所よりてみあそびく一就る
其後うのやのとお止むまく砌の下よりよる菊と
綿とほのきの綿包紙御身のまん入きて參る
白三輪赤三輪黄三輪都合九つんなりて主上院女院中
官親王あとひこゑとついて菊の花のうつよ志をめやうに
少くあると白と黄と赤と

女中も次第持奉へまほよし綿毛せても色紙ハ菊の毛ふ残りおく次の入色紙と其上よりおもかげの毛くらむせら又一人の料ハシモフリシ菊の毛ふおまく内に小番の衆とおなじくとおほよし

九日毎事三月五月ホの節供は同タ方の御祝う女中の衣をやうニツキモトナラモうきハ猶ましのうを用ふ^此三枚めのうりしるくの花とぞさみ入りす一首の懐唄あり詠進ス七夕は同一重陽の宴の心なすも旧院の御とく九首の事ある其後また一度あると誂せよとおもふ

十三日八月十五夜

十六日御

十月朔日毎年この日は御所御座の左の方よもと炭の火鉢とおく炭の立やうあるよよく女中この火鉢を暑用九月中ハこの火鉢をもととしまむらとて給をどうと重ねてあるタ方の御そひよも張るのねどと暑るよもみのと亥の當日あひのとみほと御さんと供す御そひとかくらる夫と入のや止よもくらむと給する御所と親王方門脇方比尾衆大臣未其外番衆八幡別當医師おひる

まくやうせん一色シイ小かくも水引スムカヒゆせん
とく出内ハタケの男衆院ウジイニの女中御所メイヂの上鶴同乳母カミツクモ
のす出ハタケ原ハタケ包ハラフく出ハタケ原ハタケつすくも小かくも
まくらひと畢竟或ハタケ賞観シヤウカンの人或ハタケ外様入ハタケたくも
小包ハラフと終ハタケるあきはの申より物ハタケ初度ハタケハ菊竹
志ハタケのと中度ハタケとすと二度ハタケめいちあくとす
とあくとくの葉ハタケとせん入ハタケの名ハタケと書ハタケてくと帯ハタケ
まくらひと御ハタケぐんでくのつる公卿ハタケくむ追ハタケハ黑白品ハタケ、殿上
人ハタケ赤五位殿上人已下ハタケ白児ハタケ赤地下ハタケ白花ハタケの入
ハ三度一度ハタケ二度ハタケ一度ハタケ赤ハタケ黑白ハタケキハ赤ハタケと終ハタケる

家と賞観シヤウカンのゆをなすと女中ハ上鶴ハタケのゆハタケと黒中
鶴ハタケ赤下鶴ハタケ白儲君の親王の上鶴ハタケをもめ御所メイヂ
の上鶴ハタケ赤其家とくハ黒ハタケのゆハタケとからむと禁中とくハ
中鶴ハタケの准據ハタケをもとあると又后ハねハタケまよとぬハタケとも后の
御料ハタケとくの御ハタケくんふ土器ハタケニツハタケもとくほんぐんでくと色
とくかくと色をよしの内ハタケおハタケあつハタケとくとぬハタケとも
參ハタケ菊ハタケのゆハタケあくひとく丹波國野勢ハタケとす所ハタケよし官
よ入ハタケく發ハタケる物ハタケあると則ハタケりせと名付ハタケく夕方の御祝ハタケよ供ハタケ
衛士ハタケさんと進ハタケ上ハタケを高ハタケくとんとく夕方御ハタケいとひ常
の御所ハタケとく參ハタケ御座ハタケ未例ハタケめく先ハタケづハタケ、
臺ハタケよもく臺
のまへ両方ハタケる是

○玄上の錄子
覆き

あて花足のあく當時世俗、とて奉るまへせん御前よりうそを
流布ふ足りつゝありとある。とて奉るまへせん御前よりうそを
亥の方よりむらをぬへくつとすよもいたる御直衣のまへ^{アヒ}
とあらむく御直衣へまへくあへる御座うそかくほど、
うそかく御直衣へまへく供御とサレ奉る親王
女御とあまむ御相伴たゞく次第ふまく奉る親王半
尾暑用もまくもふせんの入袖とおほづく及むく女の馬
ちのせんの入唐衣の袖とおほづく女中と上鷹中らへ次第
御前より下らか衣上うそて上鷹の唐衣の袖とおほづく
中鷹の唐衣の袖とおほづくと同休臺此臺亥の外
目うそて上鷹の唐衣の袖とおほづくニツムモモテ
供す白毛土器五つ小御タケトと入る臺むらまく都
合十く御タケトと入る臺むらまく都合十く御タケト
一々あらまく又西向より居直らをぬへ上鷹中らへ下鷹
福ウチカケもくもくまく御益次小二献御まづと供す御さう
を常のまくとひまく入馬さうと奉る二献のせと
供す三獻めハ天敵と御タケト例のまくひまく天敵
のつて初缺より供する御じまくのうある御りんとうと

てうと供す而ふもまくせぬまくせん手長の人例のま
ぬといまく持く暑座かくもひまくとがく下鷹ハモリ
まくもく著す法と同休臺此臺亥の外
目うそて上鷹の唐衣の袖とおほづくニツムモモテ
供す白毛土器五つ小御タケトと入る臺むらまく都
合十く御タケトと入る臺むらまく都合十く御タケト
一々あらまく又西向より居直らをぬへ上鷹中らへ下鷹
福ウチカケもくもくまく御益次小二献御まづと供す御さう
を常のまくとひまく入馬さうと奉る二献のせと
供す三獻めハ天敵と御タケト例のまくひまく天敵
のつて初缺より供する御じまくのうある御りんとうと

とくちゆひくちきあつてよもを旅ひく御ゆひよも
しやもとおもむかす事前よりえう
たゞ四威殿上人の内清花の族大臣の子或ハ孫両頭
たゞ二度の時も三度の時も一度ハ黒とあるとす
五位殿上人を又同へては賞翫ゆるも亦走り下
補せらるゝ入番量と称せらるゝ又親王女御第一の
公卿をもおもむく迄ハかく敷居のよおもとまつよ
まつゆるおもゐのこの御いとへ兩度三度共もまつ
ゐのとよへ女中の衣をもとせんじる外ハさんざ
唐あやあやの小さこと心次第は着用ある

十五日御月待日向あはれと大いに毎年
あまくわらふときからあまく吉田より仰く御代官も
阿波新院の時から御所へ一度あるまつ
十一月朔日毎年例のとく近江國よりもむへといふとの
献スルソラキタマとせんげあつて

郁子近江國高島郷より供之す

宿まつて四季の間の庭より大らく小燈明供物などまつ
て一箇としむる四辻其外ともももむきりまつて
參る二張も二ぢやうも時宜より一箇とし 箬ひく今まつ
時ハ笛ともももとらる時宜よりふあとも樂ハ林寺太
平らかまことの後勾當あいへ局ともも此すあり事

もてまやうわうあら

二番の丑の日今夜より女中ある衣をすうとする當日
うなづくと二と三日後から明日に至る何
とも着用する四季の間の邊り勧盃ある中の丑の日
ハ五節のちやうの試の日ありてあても帳臺の試ハ丑
ニリあるとよも上あり下の丑の日と用る事時宜よほ
十二月朔日毎事例のとくとすと己後女中ある
衣をすうと見る間があるとくいふを必くとむと見る
三冬のとくハ紅梅と二重りく著る
八日すうの物よりすうと供す夕方うんそりあ

の御さうと參る正月七日の拂はれあひ水もおも一煤
拂陰陽頭勘文すとくとく日時と定めらる勾當も
一兼日殿上人とすと催すと各參すあつまる其外も
主事大もと衛士の者とそもくの奉行の人催すと
よもく參る刻限小典侍一人内侍一人をとくとく
劔室の間近代以
間あらうとく劔室の案あらうニクハと翠牛イナと
常の御所の御座のうと大宋の屏風一双引めにして志
りくとの中下案ハ神祇の伯さんーの間の煤と拂ひ
掃除せしめ事とすとく本やく人劔室とすとくまとく
昇其後吉方よも拂ひすとくの方ハ衛士手のもの

あまくとく具一とくさむせり御薦疊も新調或ハ古物とぞしとぞの是手の者与りて合力を
るこ此間便宜の所よりつらまやレ其所ノニ一粒ある
モ初献がんニえん供一をくらむ御前とて其
後女中より御見廻きの公卿めくらむ殿上人
内ノの衆ハのまくとくめ出でまくからんとくふとく
御乳母とくとやくい勾當内侍政伊与さくらるく侍とく
一あま其自ハ女中老若よりく世俗ふるくのうと
うよ綿とかくわくとくふるとくゆゑひ考く勾當局
ふくかといのまくとあま内侍所よりも近年嘉例

度あまとくりあまとくさむせり終まく本殿より還御常の
御所より御まくみ參るあつとのまくとく相子やうの物
三枚あま女中もあつとのまくとく倒のまくとく
すまくとくぬまくとく女中もくらむ天約造の事
半ナ御くとくあまとく陰陽頭勘文よりく日時と定
らる年中の御くとくのぶやく御まくゆく木の物とども
あはれく大くさんとくとく上とがく捨まくがくま
く沉香とくとくみすくの色よ入はくのくまく
く出ス女官よと傳づく戔人衛士よくい吉方よじゆく
まくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

参る事なり色ハ女官より候ふあり

節をちりあつと供す夕方ほどの御所例の御座
より御坐の間を参る先芋イモを供す次よりが
ニツと次小豆もつニツまめと入て三方よりもくまある
もくさん三方あつて御前よりまめと豆を並べ二つのま
と合せニツあつて御左の手よりまめと豆をまは
ニツの中あるまめのうよおほひつるうそくと右の馬
手よりせまし豆と柄の方へ二度うせまつ柄の方
より御うつの方もまめと御うつの方より豆を打とくと豆を並べ三方ふもとをまくとて勾當よつて

勾當ハラおのと左の手よりまめと右の手よりうろさ
まく立あつて一まく三度ほどまく御殿中房ゆきうつ
まくともうめくる此間ふかくけ入るまくと御うの
數參る勾當うつを參るがくはよ追儺香とくわ
くわく參るがくはよ追儺香とくわくはよ追儺香とくわ
くわく其後勾當の内侍又御殿中と持くまく次
弟よてし出ス御盃マサニのまく一献とくわる御前とてく
くわくなほくめくまく御方よりよあくまくまく
くと持く御まく参る次よ勾當とくわくはよ追儺香とくわ
くと参る御後より女中福マダラまくまくしてまくまくけの所より

せましとて三献りの三教め天敵とく女中とく御と
にあら御前とて仰て殿上人御鳥三聲の後還御勾
當御や拂まつめ御ごの數鳥目御ごの數すうもて參る御身みことて
引令ひきよめ御ごの數すうもて參る御身みことて
らまを返かへまわらじうどりどりまくまくやくに退しりぞく故實ごじゆとす
晦日御ゆゑの参まいが月つき同とも一夕方常おほひの御所ごしょと一教きょう
參まい勾當御ごとうのもあゆのうちんばんまく御ごの數すう引令ひきよめ一重いちじゆうももす
御身みことて
せましとて返かへまわらじうどりどりまくまくやく拂まつめ同とも一御ご
間ままく内うちのうち衆御みこうと御ごのの御ご座ざ
小著こくしょ次勾當ごとうおいい今夜こんやおちち油あぶらと供ともす

當時年中行事上卷畢

